奈良・秋篠（あきしの）・山陵（みささぎ）遺跡

1 所在地　奈良市秋篠町・山陵町

2 調査期間　一九九四年（平6）四月～一二月

3 発掘機関　秋篠・山陵遺跡調査会、奈良大学文学部考古学研究室、学校法人正強学園

4 調査担当者　水野正好・酒井龍一・角南聡一郎・佐藤亜聖

5 遺跡の種類　集落跡・河道跡・埴輪埋設遺構・水田跡

6 遺跡の年代　縄文時代晩期、古墳時代中期～後期、飛鳥時代、奈良時代後期、平安時代、鎌倉時代、室町時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

（奈　良）

秋篠・山陵遺跡は奈良市の北西、西大寺を南に望む京北条里地域に位置する。奈良大学付属高校の移転に伴い、奈良大学文学部考古学研究室を中心として秋篠・山陵遺跡調査会を結成し、約一万㎡を対象として調査を行なった。

調査の結果、縄文時代晩期の土器溜まり、古墳時代中期の土坑、同後期の溝・竪穴住居・埴輪転用の井戸状遺構、奈良時代後期の倉庫・井戸・溝、平安～室町時代の集落・耕作遺構・水田、各時代の河道を検出した。中でも京北条里に関して、七世紀段階では自然地形に沿った土地利用が行なわれていたものが、八世紀中葉～後葉になって一定の規制をもった土地利用に変化することが判明したことは大きな成果である。

木簡は調査区の南側、第四調査区の井戸ＤＳＥ〇一から出土した。ＤＳＥ〇一は一辺九〇㎝を測る方形隅柱横桟留の井戸で、検出面から井戸底部までは一八〇㎝を測る。木簡は井戸底から、文字の書かれていない長方形木片とともに出土した。また、上層からは「寺」と墨書された土師器片も出土した。埋土内出土の土器はいずれも八世紀後半のものである。この他に、第三調査区井戸ＣＳＥ〇一から体部に「司」と横位で墨書された同時期の須恵器杯が出土した。

当遺跡の奈良時代の遺構としては、八世紀中葉頃に二間×二間の倉庫四棟が存在したが、中葉から後葉のいずれかの時期に方位をたがえて規模の大きな建物群に変わる。また遺物は、先述の木簡や墨書土器のほか、瓦・緑釉瓦・銭貨（万年通宝）・砥石・鞴の羽口・スラグ・製塩土器などがある。

これらの特殊な遺物のあり方は、当遺跡が寺院の造営に関連する遺跡であることを示唆する。周辺地域において八世紀半ばから九世

紀初頭に造営された寺院としては、一・二kmに位置し、『続日本紀』宝亀一一年（七八〇）六月戊戌条に初見し、その頃の造営と考えられる秋篠寺をあげることができる。立地の問題や決定的な根拠を欠くが、当遺跡は秋篠寺の造営と何らかの関係を持つことを指摘できよう。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「。廿四日下米　八合乎知方大刀自　六合阿治吾公
　　□□□　六合□□□　八合松万呂

元来もう少し幅のある長方形の板材であったものと考えられ、下端も一部欠損する。また、上部には用途不明の径一mm前後の小孔を持つ。木簡の性格については米の出納にかかわるものであると考えられる。

木簡の釈読は奈良大学水野柳太郎氏による。なお木簡そのものは現在奈良大学において保管している。

廿〔六カ〕□日〔収納カ〕□米肆〔斗陸升カ〕□□□　(387)×(28)×5　081

9　関係文献

秋篠・山陵遺跡調査会、奈良大学文学部考古学研究室、学校法人正強学園『秋篠・山陵遺跡』（一九九八年）

（佐藤亜聖）